

長塚節全集

第三卷

春陽堂版

長塚節全集 第三卷

昭和五十三年一月二十五日 發行

著者 長塚節
なが つか せき

發行者 和田欣之介

發行所 株式會社 春陽堂書店
東京都中央区日本橋三丁目四番十六号

印刷 三協美術印刷株式會社
製本 有限會社 丸山製本

目次

明治三十一年	3
明治三十二年	5
明治三十三年	7
明治三十四年	29
明治三十五年	42
明治三十六年	86
明治三十七年	141
明治三十八年	195
明治三十九年	258

明治四十年	288
明治四十一年	297
明治四十四年	320
明治四十五年	323
大正三年	337
俳句	393
解題	399
發表作品初出一覽	415
校異	428
卷末記	479
初句索引	485

歌 集

明治三十一年

暮春雨

惜しまるゝ花のこずゑもこの雨の晴れてのちや若葉なるらむ

春哀傷

林子を悼みて

ちりしみのうらみや深きみし人のなげきやおほきあたらこの花

海邊衛
(ちどり)

昨日こそうしほあみしか大磯のいそふく風に千鳥なくなり

明治三十二年

元旦

若水を汲みつゝをれば標はへしふたもと松に日影のほりぬ

菖蒲

生れしはをのこなるらむ菖蒲草ふきし軒端に幟たてたり

避暑

この夏は來よと文しておこせたる伯母がりとはむ山のあなたに

秋郊虫

萩こえし垣をまがりて右にをれて根岸すぐればむしぞなくなる

時雨

水仙の花にむしろもおほひあへず小さき庭をかせ時雨きぬ

初雪

船にねて船をいづれば曉のはつ雪しろしかけはしの上に

明治三十三年

森

野を行けばたゞに楽しく森行けばことゝしもなく物ぞ偲ばゆ
菅の根のながくし日も傾きて上野の森の影よこたはる

雪中梅

睦月七日寺島村によぎりきて雪かさきたる梅あるをみつ

竹の里人をおとなひて席上に詠みける歌

歌人の竹の里人おとなへばやまひの牀に繪をかきてあり

荒庭に敷きたる板のかたはらに古鉢ならび赤き花咲く

生垣の杉の木低みとなり屋の庭の植木の青芽ふく見ゆ

茨の木の赤き芽をふく垣の上にちひさき蟲の出で、飛ぶ見ゆ

人の家にさへづる雀ガラス戸のそとに來て鳴け病む人のために

ガラス戸の中にうち臥す君のために草萌え出づる春を喜ぶ

古雛をかざりひゝなの繪を掛けしその床の間に向ひてすわりぬ

若草のはつかに萌ゆる庭に來て雀あさりて隣へ飛びぬ

ガラス戸のそとに飼ひ置く鳥の影のガラス戸透きて疊にうつりぬ

枝の上にとまれる小鳥君のために只一聲を鳴けよと思ふ（座上の剝製の鳥あり）

四月短歌會

桃花

庭の隅に蒔きたる桃の芽をふきて三とせになりて乏しく咲きぬ

星

夜になれば星あらはれて晝になれば星消え去りて月日うつり行く

化物

ものゝけの三つ目一つ目さはにありと聞けどもいまだ見し事の無き

剥製鳥

木の枝にとまれる鳥のとまり居て逃ぐる事もなし鳴く事もなし

竹の里人に山椒の芽を贈りて

山椒はくすしき木なり芽もからくその實もからくその皮もからし

鄙にあれば心やすけし人の家の垣の山椒の芽を摘みて來つ

山椒の刺をかしこみ手をのべて高きほつ枝の芽を摘みかねつ

山椒の花はみのらず花咲かぬ山椒の木に實はむすぶとふ

竹やぶの山吹咲きて山椒の辛き木の芽の摘むべくなりぬ

同櫨^(たら)の芽を贈りて

藪わけてたらの木の芽を尋ねればさきだつ人の折りし跡あり

紙につゝみ火にあぶりたるたらの芽は油にいりてくらふべらなり

たらの木の木の芽を摘むと村人の通はぬ藪に我入りにけり

刺生えて枝も無き木のたらの木は鳥とまらねば鳥とまらずといふ

竹やぶにたまゝ生ふるたらの木の刺ある木の芽折りて贈りぬ

芝居

をかしといふ猿の芝居を見に行けば顔に手をあて猿が泣きけり
むしろ掛けし芝居の小屋は雨漏りて雨のふる日は芝居やすみぬ

三人根岸草廬に會し庭前の風といふ題にて

襟を吹くすゞしき風に庭の面の萩の若葉はこなたなびきぬ

垣の外の椎を吹く風垣の内の萩をなびかし此家に入る

隣家に碁をうつ音の聞えきて竹の末葉に風わたる見ゆ

垣の上の梅の木末をゆるがしてすゞしき風のふところに入る

梅の木の木末ゆらゝに風吹けど松のみどりは動かざりけり